ＩＰＭ実践指標モデル（キャベツ）

分類		管理項目		管理ポイント	点数	チェック欄		
						昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
予防	病害虫・雑草の発生しにくい環境の整備	ほ場内、周辺の除草（必）		病害虫の発生源となるほ場内やほ場周辺の雑草を除去する。	1			
		健全種子の選定		消毒済の種子または種子消毒を行って使用する。	1			
		健全苗の定植（必）		定植苗は生育がよく病害虫の発生加害のない健全な苗を使用する。	1			
		施肥管理		5年に一度は土壌診断を受け、土壌ｐＨ等を矯正し、適切な施肥を行う。	1			
		ほ場の選択		水はけの良いほ場を選択し、低湿地での作付けは避ける。	1			
判断	防除要否、タイミングの判断	病害虫発生予察情報の確認（必）		病害虫防除所が発表する発生予察情報を入手し確認する。	1			
		気象情報の把握		気象情報を把握し、防除の要否を判断する。また、適期防除に心がける。	1			
		病害虫の観察		ほ場での病害虫の発生状況を確認し、防除に活かす。	1			
		トラップの設置		黄色粘着トラップ、フェロモントラップ等によりほ場の害虫の発生動態を確認する。	1			
防除	耕種的防除	連作の回避、輪作		萎黄病や根こぶ病などの連作障害を予防するため、アブラナ科以外の作物と輪作を行う。	1			
		発病株・残さの処理（必）		菌核病等の発病株は見つけ次第、早期に抜き取ってほ場外に出し、適切に処分する。残さも同様に処分する。	1			
		抵抗性品種の利用		病害の発生が問題な場合は抵抗性品種を用いる。	1			
	生物的防除	性フェロモン剤や生物農薬の利用	害虫	適用のある害虫に対して、性フェロモン剤の利用や、ＢＴ（バチルス・チュリンゲンシス）剤、ボーベリア・バシアーナ剤などの生物農薬を利用する。	1			
			病害	適用のある病害に対して、シュードモナス・ロデシア剤などの生物農薬を利用する。 菌核病に対してコニオチリウム・ミニタンス菌製剤をすき込み時～定植前に処理する。	1			
	物理的防除	防虫ネットの設置（必）		育苗施設や育苗ほ場は、防虫ネットや寒冷紗で被覆し、害虫の飛来や産卵を防ぐ。	1			
		土壌病害・センチュウ対策		太陽熱消毒、熱水土壌消毒、散水蒸気消毒などを行う。	1			
	化学的防除	農薬の使用全般（共通）（必）		十分な薬効が得られる範囲で、最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上で、使用量・散布方法を決定する（薬剤散布後の残液が出ないように薬液を調整する）。	1			
		粒剤の使用		定植期に農薬を施用し、少量の薬剤で生育初期の病害虫の発生を有効に抑制する。	1			
		散布方法		農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。 防除は無～弱風時を選んで行う。	1			
		ローテーション防除		農薬の使用にあたっては、農薬工業会が提供している作用機作による農薬の分類（IRAC、FRAC）を確認し、特定の成分のみを繰り返し使用しない。さらに、当該地域で薬剤抵抗性が確認されている農薬は使用しない。	1			
		薬剤の選択		土着の天敵に影響の少ない薬剤を選択する。	1			
		散布後の処理		散布器具、タンク等の洗浄を十分に行い、残液やタンクの洗浄水は適切に処理し、河川などに流入しないようにする。	1			
その他		作業日誌（必）		各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、使用した農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のＩＰＭに係わる栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
		研修会等への参加		県や農業協同組合が開催するＩＰＭ研修会や防除研修会等に参加する。また、研修会等の内容は、家族や作業者等へ周知し、情報共有する。	1			
					合計点数			
					評価結果			

＊　（必）と記述している管理項目については、必ず管理項目として設定しチェックする。